

## 学術情報の流通機構をつくる

## 学術情報開発研究部門

情報が大量に生産され氾濫している現代社会において、真に有用な情報を取り出し、効率よく利用するための環境の開発が急務となっています。同時に、膨大な規模を備えた情報資源を効果的に活用するには、それらが適切に組織化されたデータ集積基盤の構築が不可欠です。



吉川正俊 教授

情報連携基盤センター学術情報開発研究部門では、名古屋大学構成員の教育・研究活動にとって価値ある学術情報を効率的に利用できる機能を備えた情報流通基盤の実現を目指しています。日々巨大化する情報ネットワーク上に分散した学術情報を、統合的に利用可能な次世代ライブラリを構築・展開することにより、より効率的な学術活動の遂行が可能になることが期待できます。

利用価値の高い流通機構を実現するための重要なキーワードは情報の集積・加工・発信であり、その効果的な仕組みを開発することがポイントとなります。

集積とは、構成員により生産された研究成果や電子教材などのメタデータを統一的に集約しデータベース化すること、加工とは、学術情報の多言語化や構造化などをとおして利用者ニーズに合致するようなデータを作り上げること、また、発信とは、必要な学術情報を容易に取り出すための優れた情報検索や情報抽出の機能を備えた知的ユーザインタフェース環境を整備することです。

本研究部門は、吉川正俊教授、松原茂樹助教授、津田知子助手の3名から構成されており、学術データの集積・加工・発信に関する情報技術の高度化を目指して活動を行っています。

吉川教授は、データ工学を専門としており、特に、WWW上のデータ記述形式として近年急速に浸透しつつあるXMLを基盤としたデータベース技術や情報検索技術の研究開発を推進しています。

松原助教授は、言語工学が専門で、大量文書を加工するための言語処理及び自動翻訳の方式、自然な



松原茂樹 助教授

言葉による大規模データアクセス環境を実現するための対話型インタフェースに関する研究を進めています。また、津田助手は、学術情報等のデータ蓄積基盤となる計算機の性能評価やユーザ支援環境の向上に従事しています。実現には困難な課題が山積していますが、スタッフ間の密接な協調と、センターの他部門及び学内部局との強力な連携により、その解決を目指して取り組んでいます。



津田知子 助手

昨年度、学術情報開発専門委員会（委員長：吉川教授）が発足しました。上述の機能を備えた「学術情報流通拠点」の構想と設計について検討しています。委員会活動では、本部門と強力な連携関係にある附属図書館をはじめ、学内のさまざまな部局の関連の方々から多大な協力を頂いています。

専門委員会には、(1)研究成果ワーキンググループ(2)電子出版ワーキンググループ(3)将来構想ワーキンググループの3つのグループが組

織されており、それぞれ、学内研究成果の発信データベースの整備、学術情報データの配信方式の開発、次世代図書館システムのビジョン作成を主なミッションとして活動しています。すでに各ワーキングを中心に学内外の現状や動向の調査・分析が行われ、現在、情報流通拠点の設計段階へと取り組みの中心を移しつつあります。その具体的な内容については、別の機会に紹介したいと思います。

学術情報流通機構の構築は、大学における研究・教育活動の基盤に関わる一大プロジェクトといっても過言ではありません。また、学術情報の主要な生産者であり消費者である皆様方とともに推進することなしに、プロジェクトの成功はありません。

今後とも学術情報開発研究部門の活動にご協力くださいますようお願い申し上げます。

(まつばら しげき：名古屋大学情報連携基盤センター学術情報開発研究部門)